



TITLE:

マムルーク朝時代のアレッポにおけるイスラーム宗教施設--ワクフと 關與者の検討

AUTHOR(S):

谷口, 淳一

CITATION:

谷口, 淳一. マムルーク朝時代のアレッポにおけるイスラーム宗教施設-
ワクフと關與者の検討. 東洋史研究 2007, 66(1): 133-99

ISSUE DATE:

2007-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/138212>

RIGHT:

マムルーク朝時代のアレッポにおける イスラーム宗教施設

——ワクフと関与者の検討——

谷 口 淳 一

は じ め に

第1章 ワクフ財の種類と分布

第2章 設立と維持への関与

第1節 設立者とアレッポの関係

第2節 アレッポ都市住民の関与

第3章 ダマスクスおよびエルサレムとの比較

お わ り に

は じ め に

先に筆者は、北シリアの中心都市アレッポに12-15世紀に設立された宗教施設に関して、設立数の推移、設立者の社会階層、機能の変化などについて時系列に沿って検討を試みた [谷口 2005]。しかしながら、紙幅の関係もあって、そこではこれらの宗教施設を支えたワクフについてはほとんど触れることができず、設立者については、社会階層に絞って分析をおこなうにとどめた。そこで本稿では、これらの点について、比較的まとまった情報が得られるマムルーク朝後期の15世紀に焦点を当てながら、以下のような観点から考察を試みることにする。

まず第1章において、アレッポ市街の宗教施設に対するワクフ財の種類と地理的分布について検討する。宗教施設を維持するワクフの場合、農地や商業施設など不動産がワクフ財として指定され、その経営から得られる収益が都市に設立された受益施設（ワクフ対象施設）のために用いられるのが普通である。つ

まり、ワクフは、受益施設が集中する都市部とワクフ財が分布する農村部を経済的に結びつける役割も果たしていた [岩武1994: 227-228; 三浦1995: 35]。したがって、ワクフ財の分布状況を見ることは、ワクフを介した都市アレppoとの経済的な結びつきがどの程度の範囲に及んでいたかを知ることにもつながるのである。

本稿で用いた主要史料の一つは、スィプト・イブン・アルアジャミー (Sibt Ibn al-ʿAḡamī, 884 [1479] 年没) が著したアレppo地方誌『アレppo史における黄金の蔵』(略号 KD) であるが、その活字本が1996年まで出版されなかったためか、マムルーク朝時代のアレppoについてこのような観点から論じた研究は見当たらない。アイユーブ朝時代については、エッデ (A.-M. Eddé) がアレppoを中心とした通商路を提示しているが、考察の中心は国外との交易であり、都市アレppoを中心とした域内経済に関する分析は見られない [Eddé 1999: 511-514, fig. 65]。

第2章では、アレppoとの関わりを軸に宗教施設の設立や維持に関わった人々について考察する。特に支配層⁽¹⁾について、アレppo地域に直接関わる職位にあるか否か、あるいは上位権力者であるカリフやスルターンが設立したのかどうかという区別に注目したい。政治権力者が宗教施設を設立する目的の一つとして、イスラームの保護者であることを顕示し民衆やウラマーの支持を獲得するという点が指摘されてきた⁽²⁾。しかし、このような動機を考えるためには、設立者が直接その地域に政治的な利害を有しているかどうかという点が重要であるにもかかわらず、従来の研究では、この点は明確に意識されてこなかったのである。この章の議論の中心はマムルーク朝時代となるが、比較のために12世紀からアイユーブ朝時代までの設立者についても分析対象とした⁽³⁾。

(1) 本稿で言う「支配層」とは、君主、王族とその縁者、家臣とその縁者、総督、軍人とその縁者を指す。

(2) マドラサの政治的機能に関する議論については、阿久津による学説史の詳しい紹介と批評があり、マドラサ以外の宗教施設に関しても参考になる [阿久津 1999b]。

(3) マムルーク朝のアレppoについては、宗教施設全体を対象とした分析自体が存在しなかった [谷口 2005: 66-67]。アイユーブ朝以前については、支配層、特にアミールによる設立が多いことが指摘されているが、上記のような視点からの分析は見られない [阿久津 1999a; 湯川 1980 (以上2点はマドラサについての研

また、宗教施設の設立について分析する場合、設立者として名を残した人物だけに注目しがちであるが、無名の人々が施設の設立や維持に寄与したことを示す記録も存在する。本稿ではそのような人々についても検討を加えてみたい。そして最後に、第3章において、以上の2章にわたる考察から得られた知見をもとに、アレppoの状況をダマスカスおよびエルサレムと比較検討する⁽⁴⁾。

本論に入る前に、本稿で扱う地域概念と用語の関係を整理しておく。まず「都市アレppo」または「アレppo市街」とは市壁内外の市街部を指す⁽⁵⁾。それに対して、都市アレppoを中心とした行政区域を「アレppo地域」と呼ぶ。アレppo地域が独立国家であることを示す場合は「アレppo君主国」、地方行政単位であることを示す場合は「アレppo州」と記すが、想定されている領域は同じである。なお、文脈から明確に判る場合や特に区別する必要がない場合には、単に「アレppo」と記すこともある。

アレppo地域の範囲は時代によって異なるが、カルカシャンディー (al-Qalqašandī, 821 [1418] 年没) の *Ṣubḥī* に記されているアレppo州の範囲を基準に考えることとする。*Ṣubḥī* の記述は14世紀末ないしは15世紀初頭の状況を反映していると思われるが、それはアイユーブ朝アレppo君主国の13世紀初頭における版図ともほぼ重なる [Eddé1999: fig. 63]。したがって、本稿が扱う時代においては、その範囲は比較的安定していたと考えてよからう。

カルカシャンディーの記述によると、アレppo州の北西側の境界は、アナトリア高原の南縁に沿って都市アレppoの北北東約180kmに位置するバハスナー (Bahasnā) へと至っている。この辺りが北端で、そこからさらに約100km東にあるユーフラテス川上流のカルカル (Karkar/Gargar) を結んだ線が北辺の境域にあたる。東の境界はユーフラテス川で、バーリス (Bālis) からはシリア砂漠の辺縁に沿って南西へ向かう。アレppo州に属す最も南の属域 (ʿamal) と

究) ; Eddé 1999:289 (全般), 397 (マドラサ), 402 (ダール・アルハディース), 426-429 (修道場)]。

(4) 本稿で用いた主要史料および上記以外の研究史に関する問題点については「谷口 2005」の66-67頁を参照されたい。

(5) 前者は後者に比べて抽象的な意味で用いることが多いが、厳密に使い分けられているわけではない。

表1 アレッポの病院——12-15世紀——

No.	施設名	設立時期	設立者	階層	典拠
1	Nūrī	6 (12)世紀中葉	Nūr Dn. Maḥmūd	支配者	KD 1: 445-447; Sīh: 226
2	Argūnī	755(1354/55)年	Argūn al-Kāmilī	総督	KD 1: 448-449; IMA: 334
3	Bāb al-Ġāmi' al-Kabīr	819(1416)年以前	Ibn ḥrīḥ Az	不明	KD 1: 448; IMA: 367
4	Banī al-Duqāq	9 (15)世紀以前	Banū al-Duqāq	不明	KD 1: 448

して挙げられているのは、オロンテス川沿いのシャイザル (Şayzar) である。西の境界はオロンテス川の西に連なるアンサーリーヤ山地からアンティオキア、ルッカーム山地を経てアナトリア高原へと続いている [Şubḥ 4: 119-130]。

以上の領域に加えて、マムルーク朝時代に新たにアレッポ州に属することになった領域として、カルカルからジュッラブ (Ğullāb) 川、バリーフ (Balīḥ) 川を結んだ線とユーフラテス川で囲まれる地域、キリキア地方、マラティヤ (Malatya) 周辺の地域が列挙されている [Şubḥ 4: 133-137]。これらの領域は、本稿ではアレッポ地域に含めないこととする。これら周辺の領域を除いて考えても、アレッポ地域の範囲は、南北約 300km、東西約 200km の広がりをもつことになる。

第1章 ワクフ財の種類と分布

本稿で分析の対象とした宗教施設は、12-15世紀にアレッポ市街に設立されたジャーミイ、学院、修道場、孤児の教室、墓廟、病院であり、すべてイスラーム関係の施設である。これらのうち病院を除く諸施設については、別稿において個々の施設に関する基本情報を提示した⁽⁶⁾。そこで本稿では、病院についてのみ表1に基本情報を掲げた。表には示さなかったが、いずれも市壁内に

(6) 谷口 2005: 82-93 (表A-1～A-5)。各施設に関する情報の典拠は表中に示した。本稿では、各施設や設立者に関する典拠に言及する場合、原則として各表における番号を示すことで代える。以下、表1～5は本稿所収の表を指し、表A-1～A-5とは「谷口 2005」所収の各表を示す。

立地していた。なお、中東における病院の歴史はイスラーム以前に遡り、またイスラーム時代にも医師に非ムスリムが含まれることがあった。このように、病院は他の宗教施設とは性格を異にする面もあるが、日々のコーラン読誦が規定されているなど、イスラームという宗教とは切り離せない施設でもある。したがって、本稿では病院も含めてイスラーム宗教施設ないしは宗教施設と総称する⁽⁷⁾。

これらの宗教施設に対するワクフ財に関して15世紀の時点で確認できる情報を稿末の表4にまとめて提示し、受益施設ごとに、ワクフ財の所在地、アレppo市街との位置関係、物件の種類を示した。受益施設が機能していても、そのワクフ財の一部が荒廃してしまうことがある。そのような場合、つまり14世紀以前の史料に記述があっても15世紀に存在が確認できない場合や、15世紀の史料が荒廃を伝えるワクフ財の情報は省いた。逆に、受益施設は休廃止になったものの、ワクフ財自体は他の施設のワクフに移管されて存続している場合は、注記したうえで表に含めた。

ワクフ財の所在地は、主に Dussaud 1927 と KD の校訂注を利用して同定し、アレppo市街からの直線距離に応じて分類した。市街地の外に広がる領域でアレppo市街からおおよそ10kmまでは「近郊」とした。以下、表中の「50km内」はおおよそ11-50km, 「100km内」は51-100km, 「100km外」は101-150kmの距離にあることを示す。史料中にアレppoの地名であることが記されているものの位置の詳細が不明な場合は、「アレppo州」と表示した。

種類欄には、ワクフ財の種類を示した。史料に農地であることが明記されていない場合でも、収益の分配比率や面積が示してあるか「取り分」(ḥiṣṣa)と記されていれば、農地からの収穫を示すと考え、農地に分類した。農村の地名が示されているだけの場合は、「農地?」と表示した。

さて、以上のようにして作成した表4からどういうことが読み取れるだろうか。最初に留意しておかねばならないのは、ここに現れた情報が全体の中の一

(7) アレppoではアルグーニー病院 [表1:2] にコーラン読誦者を置く規定が見られる [KD 1: 449]。13世紀末にカイロに設立されたマンスール病院では、職員や患者から非ムスリムを排除する規定もあった [菊池 1992: 56-57]。

表2 アレッポにおけるワクフ財の種類と地理的分布——15世紀——

	商工業	浴場	製粉	農地	農地？	その他	不明	合計
市街	19	1	0	0	1	3	0	24
市街？	5	2	0	0	0	0	0	7
近郊(～10km)	4	2	4	7	1	0	1	19
近郊(～10km)？	0	0	1	1	0	1	0	3
～50km	0	1	1	28	12	0	0	42
～100km	0	0	0	3	3	0	1	7
～150km	0	0	2	1	0	0	0	3
不明(アレッポ州)	0	0	0	2	0	0	1	3
ダマスクス州	0	0	0	2	0	0	1	3
不明	0	0	1	8	5	0	0	14
合 計	28	6	9	52	22	4	4	127

単位：件数

部分に過ぎないということである。ワクフ財に関する情報が全く得られない受益施設がかなりあるうえに、各施設のワクフ財も主なものに限られていると考えられるからである⁽⁸⁾。

今回収集した情報に拠る限り、異なる施設種の間でワクフ財の分布や種類に有意な違いは認められない。では、これらのワクフ財全体を一括して捉えと、どのような特徴が見えてくるだろうか。表4からワクフ財の種類と位置区分ごとに件数を集計し表2にまとめた。「商工業」欄の数字は、表4の隊商宿、石鹼工場、店舗、市場、圧搾場、パン焼き窯の件数の合計である。「農地」には果樹園を含め、家屋、邸宅、厩、庭園は、「その他」とした。

表2から明らかなように、アレッポの諸施設を支えたワクフ財は、大きく二つのまとまりに分類できる。一つはアレッポ市街と近郊に存在した商工業施設および浴場で、主に都市におけるサービスを提供し賃貸料や手数料を得る物件である。また、小麦などを粉にする製粉場も、大消費地である都市アレッポの

(8) 表には含めなかったが、ウマイヤ・モスクを支えた主要なワクフ物件は、モスクを囲むスーク(市場)の店舗であったと思われる。803(1400)年にティムール朝軍がアレッポを蹂躪した際、諸スークが荒廃してウマイヤ・モスクの収入が減少したという記録がある [KD 1: 229]。表4の注(15)も参照せよ。

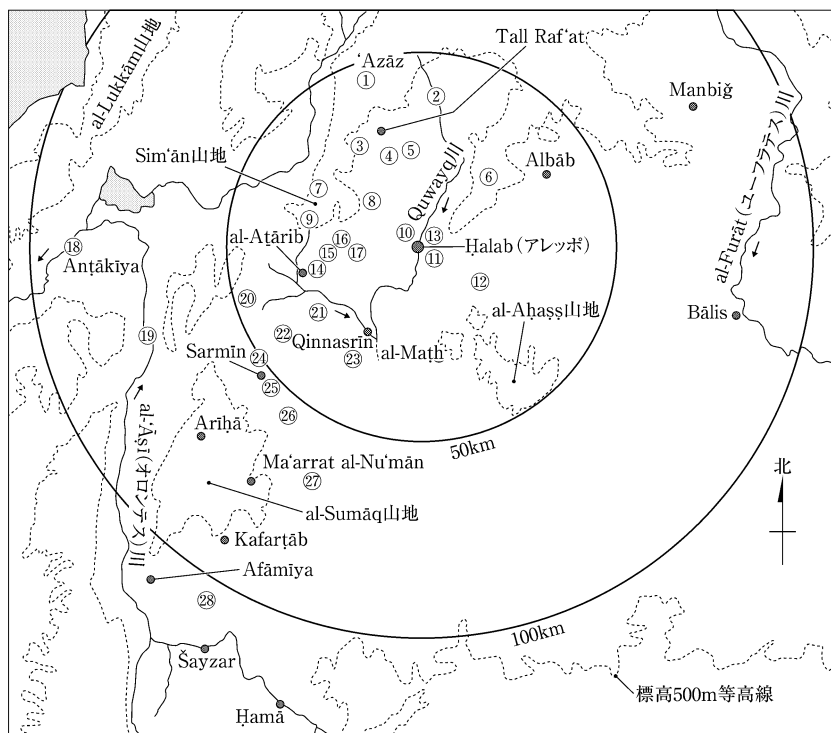


図1 アレppoにおけるワクフ財の分布——15世紀——（Cornu1985:plan Iを基に作成）

近郊に存在するものが多い。川沿いに立地している製粉場〔表4：学院12，21〕は、水力を利用していたのであろう⁽⁹⁾。

ワクフ財のもう一つの中心は、アレppo近郊から50km圏内にかけて分布する農地である。図1を見ればわかるように、50km圏外に分類された物件も、ほぼ半数は50km圏のすぐ外に位置している。これらを含めると、ワクフ財の大半がおおよそ50km圏内、すなわちアレppo市街から1－2日行程の範囲内に存在したことになる⁽¹⁰⁾。また、その分布は都市アレppoの北から南西にかけ

(9) 「圧搾場」とはオリーブの実から油を取るための施設であろう。また、表4に示したとおり、「隊商宿」「製粉場」と訳した物件は、史料中ではそれぞれ2種類の原語が使い分けられているが、それらの違いを判別するだけの情報は得られなかった。

(10) たとえば、580（1184）年にアレppoを訪れたIbn Ḡubayrは、アレppo北東

て広がる丘陵地帯に大きく偏っている。この分布域は、古くからオリーブ栽培などが盛んな農業地帯に重なっており⁽¹¹⁾、50km 圏内の農業生産がアレppo市街の宗教施設を支えていたことを明瞭に示している。見方を変えると、都市アレppoを拠点とする農地経営に適した範囲は、おおよそ50km 圏内であったとも言える。

この広がりと行政区域の関係を最後に確認しておこう。アレppo市街の宗教施設を支えたワクフ財の分布は、先に示したアレppo州の範囲に比べるとかなり狭く、その中央部から西部と南部に偏っている。ただし、明確に州外に位置する物件はダマスクス州の3件だけであり、大半がアレppo州内に分布していたことがわかる [図1, 表2]。

第2章 設立と維持への関与

アレppoにおける宗教施設の設立にもっとも重要な役割を果たした人々は、12-15世紀を通じて支配者や軍人を中心とする支配層であった。しかしながら、マムルーク朝期には、学院以外の施設に関して支配層以外の人々による設立が増加し、件数としては過半数を占めるようになった [谷口 2005: 78]。それでは、宗教施設の設立・維持に寄与した人々とアレppoとの関係はどのようなものであったのだろうか。以下、2節に分けて考察する。

第1節 設立者とアレppoとの関係

本節では、社会階層に加え、アレppo地域との関係に注目しつつ12-15世紀を対象に宗教施設の設立者の傾向を考察する。分析対象とした設立者は、「谷口 2005」の表 A-1～A-5 と本稿の表1に挙げた設立者のうち、情報が乏し

35kmに位置する Albāb を夜に発って、翌朝午前中にアレppoに到達している [Ibn Ġubayr: 250 (日本語訳: 244)]。

(11) Eddé1999: 491-495 にアイユーブ朝時代におけるアレppo周辺の農業の状況が紹介されている。マムルーク朝時代も状況に大きな変化はなかったと思われる。ビザンツ帝国期の状況については、G. Tchalenko の研究に基づいた渡辺金一による詳しい紹介を参照されたい [渡辺 1980: 第4章]。

く分析不可能な人物を除く97名である。アレppo地域との関係に注目して検討するために、「谷口 2005」とはやや異なる以下のような方針で分類し、稿末の表5に掲げた。

まず「上位権力者」とは、シリア以外の地を本拠地としアレppoの支配者の上位に立つ権力を有する者で、名目的な宗主権者も含める。「アレppoの支配者」とは、アレppo君主国の支配者に加えて、他地域を首都とする国家が派遣するアレppo州総督を含む。他地域の総督を歴任した者でも、アレppoの総督に就任しなかった場合は、「支配者」ではなく「支配層」に分類した¹²⁾。「アレppoの支配層（文官以外）」とは、アレppo地域においてその支配者に仕えた軍人、廷臣および彼らの一族や解放奴隷など縁者を指す。「アレppoの文官」は、アレppoにおいてワズィール以下の行政職およびカーディー職に就いた人物である。以上の人物については、経歴欄にアレppoにおける職位などを記した。支配層に属す人物でアレppo地域における軍事・政治的な立場が不明な場合は「支配層（アレppoにおける職位不明）」とした。設立者は区分ごとに時系列に沿って配列し、当該人物が設立した施設は、略号と番号の組み合わせによって施設欄に表示した。

以上のような表5における分類に基づいて、時代と区分ごとに設立者の人数と設立件数を集計したものが表3である。この表を見てまず気づくことは、いずれの時代をとっても、上位権力者による設立がきわめて少ないということである。この範疇にはアッバース朝カリフ、セルジューク朝スルターン、アイユーブ朝のカイロのスルターン等も含めて検討したが、設立者として史料中に現れるのはマムルーク朝スルターンの3件だけであった。12世紀初めからアイユーブ朝時代にかけて、上記の上位権力者たちがアレppoに対して名目的な宗主権しか保持していなかったことを、宗教施設の設立という点から裏付ける結果となっている。

上位権力者とは対照的に、全時代を通して設立者の半数以上を占めたのは、

(12) 名目上の支配者に代わって実権を握っていた人物も「支配者」に含めた[表5: 2, 15]。一方、Aydimur al-Zāhiri [表5: 27] は、アレppo総督(wāli)という肩書きを持つが、アイユーブ朝アレppo政権下の地位であるため「支配層」に分類した。

表3 宗教施設設立者とアレppoとの関係——12-15世紀——

	ザンギー朝 時代・以前		アイユーブ朝 時代		マムルーク朝 時代		合 計	
	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数
上位権力者	0	0	0	0	3	3	3	3
アレppoの支配者	4	17	2	5	13	17	19	39
アレppoの支配層（文官以外）	4	6	13	21	7	7	24	34
アレppoの文官	0	0	4	6	5	5	9	11
その他	1	1	3	5	11	11	15	17
アレppo関係者小計	9	24	22	37	36	40	67	101
支配層（アレppoでの職位不明）	4	6	13	16	5	7	22	29
その他（アレppoとの関係不明）	0	0	1	1	4	4	5	5
関係不明者小計	4	6	14	17	9	11	27	34
合 計	13	30	36	54	48	54	97	138

アレppoの支配者や彼らに仕えた人物などアレppoに直接利害関係を持つと考えられる者たちである。特に、ザンギー朝時代以前とマムルーク朝時代は、人数で約7割以上、件数ではおよそ3/4以上をアレppo関係者による設立が占めていた。

ただし、支配層に属すがアレppoにおける職位が不明であるという設立者もかなりの数になる。特にアイユーブ朝時代は、そのような設立者が13名と目立つ。これらの中には有力者の解放奴隷やマウラーあるいはその息子という人物が合わせて4名おり [表5: 32, 34, 36, 37], それとは別に女性が4名存在する [表5: 38-41]。以上の8名は有力者の縁者ではあるが、どのような職位にあったかは不明であり、宗教施設設立の場としてアレppoを選んだ理由を考える材料に乏しい。

一方、表5の9, 10（ザンギー朝時代）、29, 30, 31（アイユーブ朝時代）、74（マムルーク朝時代）の計6名は、他所に拠点やイクターをもつ有力者であり、アレppoにおける宗教施設の設立動機として直接的な政治的利害を考えにくい。以上のような事例は、宗教施設の設立動機が複合的なものであり、支配層にしても政治的な意図だけで宗教施設を設立するわけではないということを改めて

示していると言えよう¹³⁾。

明確な利害関係が確認されないにもかかわらずアレppoに宗教施設を設立した者が支配層の中になんか存在したことを考えると、情報不足による不正確さを考慮しても、マムルーク朝スルターンによる設立が3件のみというのは少ないように思える。スルターンによる設立の少なさと対照的に、マムルーク朝のアレppo総督による設立は17件（13名）と際立って多い。

12-15世紀を通じて、アレppoにおける宗教施設の設立を担ったのは、社会階層にかかわらず主に現地と深い関係をもつ者であり、その傾向は、アレppo地域が事実上の独立国であったアイユーブ朝時代においても、シリアとエジプトがカイロのスルターンの下で統一されたマムルーク朝の下でも、大きくは異ならなかったと言える。

第2節 アレppo都市住民の関与

宗教施設について考える際には、前節のようにしばしば設立者の分析がなされる。しかしながら、あらゆる施設が一個人の力だけで設立されたとは限らず、小口の寄付などの形で無名の人々を含む複数の人物の協力が見られる場合もある。施設の維持や改修についても同様である。地域と施設の関わりをより具体的に考えるために、14世紀末から15世紀におこなわれた諸施設の設立や改修に関する記事の中から、このような人々の関わりが窺われる情報を抽出し、考察を試みることにする。

(1) ルーミー・ジャーミイ [表 A-1: 15]

769 (1367) 年に総督マンクリー・ブガー・シャムスィー [表 5: 57] が設立したルーミー・ジャーミイについては、KDの著者の父がここでムハッディスとして講じていたためか [KD 1: 245]、著者の同時代の状況が詳しく述べられている。15世紀半ば、このジャーミイの西壁に亀裂が広がり改修が必要になったが、管理者 (mubāšir) たちはジャーミイの財産を自分たちの間で分配してし

¹³⁾ 宗教施設設立のさまざまな意図については、マドラサに限定してではあるが、岩武と三浦が論じている [岩武 1994: 248-252; 三浦 1995: 30, 33-34]。

まい、何一つ工事を行わなかった。852 (1448) 年、亀裂がさらに大きくなったため、街区民 (ahl al-maḥalla) が総督タナム⁽¹⁴⁾をこのジャーミイに連れてくると、総督はその状況を見て同情した。

実はこれ以前に、アレppo商人の代表格 (‘ayn al-tuḡḡār) であったシハーブ・アッディーン・アフマド・マラティー⁽¹⁵⁾は、この修築について相談を受けていた。しかし彼は、この工事を口実に権力者 (ḥukkām) の誰かが彼の財産の一部を取り上げかねないと心配し、まず総督に相談するよう勧めたのである。そこで彼らは、総督にジャーミイの収入 (ray‘) ではその修築費用を賄いきれないことを知らせた。すると総督は「私がその修築費用を寄付しよう」と言ったが、その一行は「いえ、我々は身を低くしてマラティーにその修築をおこなうようお願いします」と答え、総督から「おまえたちにとって都合がよいようにせよ」という言葉を得た。彼らがマラティーの許を訪れ以上のやりとりを伝えると、彼は 500 iḥūrī⁽¹⁶⁾をジャーミイの修築のために寄付した。さらにシフナ家のムヒッブ・アッディーン⁽¹⁷⁾が私財から拠出して漆喰を寄付した。総督はカイロへ使者を送って職人を招き、852年1月19日 (1448年3月25日) に修築を開始して約3ヶ月後に終了した [KD 1: 243-244]。

西壁の改修から20年経った 873 (1468/69) 年、今度は北壁とその下の地下室に亀裂が入り、翌年にはその亀裂が大きくなり修築が必要となった。そしてマラティーの寄付金が底をつく、ハーτζジュ・ムハンマド・ブン・サファー (al-ḥāḡḡ Muḥammad b. Ṣafā) が全額を寄付し改修したのである⁽¹⁸⁾。

(14) Tanam, al-Mu‘ayyadī Sayf al-Dīn. 851年9月4日—852年6月中旬 (1447年11月13日—1448年8月中旬), アレppo総督在任 [KD 2: 205, 213]。868 (1493) 年、ダマスカスで没 [DL 3: 44]。

(15) al-ḥawāḡā Šihāb al-Dīn Aḥmad al-Malaṭī. この人物は、アレppoに孤児の教室を設立している [表 A-4: 17]。

(16) Sauvaget の訳に従い、マムルーク朝内でも流通したというフィレンツェの fiorino 金貨あるいはそれに準ずる貨幣のことと解する [Trésors: 42]。

(17) 原文には Ibn al- Šihna Muḥibb al-Dīn とあるだけであるが、マムルーク朝時代にハナフィー派のカーディーを輩出したシフナ家の Abū al-Faḍl Muḥammad (890 [1485] 年没) と思われる [太田 1990: 91-92]。

(18) KD 1: 244. この人物は、善行者 (raḡul ḥayr) と評され、このジャーミイに敷物も寄付している [KD 1: 245]。

以上がルーミー・ジャーミィの2度にわたる修築経緯の概要である。最初の西壁の修復に際して語られている商人マラティーの危惧と総督との交渉の関係がややわかりにくい、改修工事に対して総督から直々のお墨付きを得ることで、その下僚からの介入を防ぐための根回しであったと思われる。いずれにせよ、ワクフ収益による修築が不可能になると、街区の住民が立ち上がり、大商人や有力ウラマーから寄付を集める一方で総督にも働きかけていることがわかる。

(2) バーナクーサーの新ジャーミィ [表 A-1: 21]

バーナクーサーの新ジャーミィは、788年8月(1386年8/9月)にアレppo総督スードゥーン・ムザッファリー [表 5: 60] が設立した [IMA: 353]。その後、ハスバク・ハワジャー (Ḥaṣbak⁽¹⁹⁾ al-ḥawāḡa) なる人物が増改築 (‘ammara) に着手したが完成できず、善行の徒 (ahl al-ḥayr) が完成した。彼らは光塔を建築し、中庭を黄色大理石で舗装したという [KD 1: 265]。

以上の経緯の記述は伝聞であることが示されており、スィプト・イブン・アルアジャミーよりも前の世代に属する出来事と思われる。したがって、一連の増改築はおおよそ14世紀末から15世紀第1四半世紀の間におこなわれたとみられる。このジャーミィを増改築しようとした人物は、al-ḥawāḡa という称号からみて裕福な商人と考えてよかろう⁽²⁰⁾。また、彼の事業が未完成に終わった理由は示されていないが、資金不足が理由の一つであったと思われる。というのも、スィプト・イブン・アルアジャミーは、この逸話を紹介したあとに「このジャーミィのワクフは貧弱であるが、その必要を十分に満たす者 (man yaqūmu bi-kifāyati-hi) を神が与え給う」と述べているからである [KD 1: 265]。善行の徒と呼ばれる人々などが資金を補い工事を完成させたのであろう。

(3) ナイラブ門外のタウバ・ジャーミィ [表 A-1: 27]

アレppoでは15世紀に Tawba (悔悟) という名を持つジャーミィが二つ設立

(19) この部分の正確な読みは不詳。

(20) al-ḥawāḡa という称号がマムルーク朝時代の有力商人に用いられたことについては、「佐藤 2004」の148頁を参照せよ。

された。そのうちの一つであるナイラブ門外のタウバ・ジャーミイの設立経緯の概要は以下のとおりである。このジャーミイが位置するナイラブ門外の一地区は、スーダーン地区 (Ḥarat al-Sūdān) と呼ばれ、酒が販売され歌姫たち (qaynāt) が居るという場所であった。禁欲主義者イブン・アルマアサラニー⁽²¹⁾は、そこにジャーミイを建設しようとし、総督タナムに対しスーダーン地区の状況を厳しく非難した。851 (1447/48) 年、彼はジャーミイを設立したが、竣工したのはその没後であった。このジャーミイ建設に対してアミール＝アサルマース・トルクマーニー⁽²²⁾などが大金を出したほか、「善行の徒が自分の財貨や自分たち自身〔の労働を提供すること〕で協力」し、そこには光塔が建てられ地面は大理石で舗装された。また善行の徒がこのジャーミイに対して複数のワクフを設定した⁽²³⁾。

(4) ウバイス・ジャーミイ [表 - 1 : 30]

マカーム門北側の街区に存在し、現在ではビザ・ジャーミイ (Ġāmi' Biza) と呼ばれる。スイプト・イブン・アルアジャミーの同時代に、古いマスジドに光塔を新設するなどの改築を施し、金曜礼拝が行われるようになった。その改築には善行の徒が協力した [KD 1: 249]。

(5) バーフスィーター・ジャーミイ [表 A - 1 : 43]

現在ではスィーター・ジャーミイ (Ġāmi' Sītā) として知られるが、AH にはバーフスィーター・マスジド (Masġid Bāhsītā) と記されており、13世紀半ば以前にマスジドとして設立されていたことがわかる [AH: 67]。その後、14世紀末ないしは15世紀前半に⁽²⁴⁾、このマスジドに隣接した家に住んでいたアラ

(21) Šams al-Dīn Muḥammad b. Abī Bakr Ibn al-Ma'sarānī al-Ġibrīnī. アレッポの墓廟や学院に滞在し禁欲主義的生活を送ったウラマー。852年3月20日 (1448年5月24日) に没し、彼が設立したジャーミイの隣に葬られた [KD 2: 211-212]。

(22) Asalmās al-Turkumānī. 名前の前半の正確な読みは不明。Sauvaget の読みに従う [Trésors: 46]。この人物については、この事例以外の情報を確認できなかった。下位の軍人であったかと思われる。

(23) 経緯の概要および直接引用部分は、KD 1: 248-249 に拠る。ジャーミイの設立年は、IN 5: 238 に引用されている碑文に拠った。

(24) 本文中に示した経緯は、マスジド拡張の当事者であるアラム・アッディーンの子が KD の著者に直接伝えた情報なので、後者の1世代前の出来事であると推定した。

ム・アッディーン (al-qāḍī ‘Alam al-Dīn) とシャムス・アッディーン (al-ṣayḥ Šams al-Dīn al-kātib) の兄弟が家を明け渡してマスジドを拡張したものの荒廃してしまった。それを、ハーτζジュ・アリー・サイバク⁽²⁵⁾ という宝石商が再建したのである。スイプト・イブン・アルアジャミーの同時代には、街区の善行の徒 (ahl al-maḥalla min ahl al-ḥayr) がさらに拡張し、何人かの商人たちが彼らに協力した [KD 1: 262-263]。

(6) ハッダーディーヤ学院 [表 A-2: 15]

ハッダーディーヤ学院は、12世紀後半に設立されたハナフィー派のマドラサであったが、803 (1400) 年のティムール侵攻後に活動を停止し、女たちの住処になっていた。そこへアラー・アッディーン・ジブリーニー⁽²⁶⁾ という禁欲主義者 (zāhid) がやって来て、女性たちを追い出し、再整備し水を引いた。そして部屋の一つを自分用にして、そこで信仰三昧の生活を送るようになった。このジブリーニーによる再建の過程で、ある善行の徒が黒い水盤 (ḡurn) を提供した。またある人々 (ba’d al-nās) は、水槽 (ṣahrīḡ) を設置し経費を全て出した。そして、このマドラサではズィクルと5度の礼拝がおこなわれるようになり、2人のムアッズインが置かれ、敷物と照明が整備された [KD 1: 350]。

15世紀のアレッポ市街において、無名の民衆が宗教施設に何らかの貢献をしたことがわかる記事は、管見の限りでは以上の6件である。限られた情報ではあるが、これらの記述に基づいて考えてみたい。まず、施設の設立や維持に貢献した「善行の徒」とはどのような人々だったのだろうか。事例(5)に見られるように、街区と結びつけて語られることもあるので、これらの人々は基本的に都市アレッポの住民であると考えてよからう。寄付やワクフを設定する者がいた一方で、労働を提供するという貢献の仕方も見られ、財政的に余裕のある住民ばかりであったとは限らない。

(25) al-ḥāḡḡ ‘Alī al-Saybak. al-Saybak としての部分の正確な読みは不明である。Sauvaget の読みに従う [Trésors: 55]。

(26) ‘Alā’ al-Dīn Yūsuf al-Ġibrīnī. なお、KD のテキストではニスバが al-Ġabartī と読める箇所もある。

商人の貢献も目立つ。マムルーク朝時代には、宗教施設を設立する商人が増加した⁽²⁷⁾。しかしながら、商人たちはその富を施設の設立に注ぎ込んだだけではなかった。事例(1)(2)(5)に見えるように、施設の増改築や改修、再建に対しても商人たちは重要な役割を果たしたのである。また、(3)の1件だけであるが、善行の徒と並んでアミールが資金を提供している例も見られる。このように、一つの宗教施設の設立や維持に対しても、さまざまな社会階層の者が関与していたのである。

住民の関与が見られた施設の種別に注目すると、(6)を除く5件がすべてジャーミイに関する記事であることに気づく。この偏りは、ムスリム住民にとって自分たちの街区にあるジャーミイの維持が重要事項の一つであったということの現れであろう。(1)と(5)の記述からは、住民が自分たちの街区にあるジャーミイの改修や拡張に取り組んでいる様子が窺われる。また、ムスリム共通の礼拝の場であるジャーミイは、特定の法学派やタリーカだけを対象とした学院や修道場に比べて、より多くの人々に善行の対象とされたと思われる。

人々を「善行」へと駆り立てるもう一つの要素は、精力的な宗教家の活動である。イスラームの立場からすれば非合法的な商売がおこなわれていた地区にあるジャーミイを建てようとしたイブン・アルマサラーニーに対して、人々(al-nās)はその意図の純粹さを認めて彼を支持したという [KD 1: 248]。また、ハッターディーヤ学院を再建したアラー・アッディーンは、他に2件の施設を再建した⁽²⁸⁾。

最後に、以上の6件の事例に関して、カイロのスルタンの関与がほとんど見られないことにも注目しておきたい。事例(1)にあるように、アレppoの住民が街区のジャーミイの惨状を訴える相手は総督であって、カイロのスルター

(27) アイユブ朝時代以前の設立者で商人であることがはっきりしているのは、Ibn Rawāḥa というダマスクスの有力商人だけである [表 5: 49]。それに対して、マムルーク朝下のアレppoに宗教施設を設立した商人は5名を数える [表 5: 91, 93, 95-97]。

(28) al-Madrasa al-Ṣāhibīya と Ḥānqāh al-Ballāṭ [KD 1: 293-294, 388]。さらに、Argūn al-Nāṣirī の墓廟の整備を手がけた al-Ġabartī も同一人物と思われる [KD 1: 429]。

ンに関与を求めることはほとんどなかったと考えられる²⁹⁾。

第3章 ダマスクスおよびエルサレムとの比較

以上2章にわたって述べてきたアレppoの宗教施設に関するワクフ財と設立者の傾向について、アレppoと並ぶシリアの重要都市であるダマスクスおよびエルサレムと比較してみたい。幸い両都市に関しては三浦徹の詳細な研究があるので、以下その研究を参照しながら比較を試みることにする。まず、ダマスクスの学院については、「三浦 1995」の稿末にマムルーク朝末期までに設立された施設の一覧表が付されている。この表に掲げられた152件のうち上位権力者による設立と言えるものは、アイユーブ朝のサラーフ・アッディーンがウマイヤ・モスク内に設立したマーリク派の講座 (al-Zāwiya al-Malikīya), その息子のスルターン=アズィーズ・ウスマーンが設立したアズィーズィーヤ学院 (al-Madrasa al-'Azīziya), マムルーク朝のスルターン=サイード・バラカが父バイバルス 1 世の墓廟を兼ねて建てた市内のザーヒリーヤ学院 (al-Madrasa al-Zāhirīya) の3件のみのようである。また、軍人層の設立者の多くは、総督などとしてダマスクスに赴任した者であるという³⁰⁾。

ジャーミイについては利用できる研究がないので、16世紀初頭までのダマスクスにおける宗教施設の情報をまとめた *Dāris* の記述に基づいて考えることにする。同書のジャーミイに関する章 [*Dāris* 2: 371-445] にはマムルーク朝時代

²⁹⁾ ただし事例(3)に関連して、スーダン地区における不法行為について Ibn al-Ma'sarānī が総督を非難した後、不法行為を停止せよという命令書がカイロのスルターンから届き、彼の力 (qadr) が強まったという記事がある [KD 2: 211]。ここに、アレppoにおける論争へのスルターンの関与が見られるが、Ibn al-Ma'sarānī が直接スルターンに訴えたのか、あるいは総督が判断を仰いだのかという点については判然としない。

³⁰⁾ 三浦 1995: 34, 48-53 (表2)。ただし、サラーフ・アッディーン自身が設立したわけではないが、彼に因んだ名称を持つようになった学院が存在する。たとえば、ザンギー朝の al-Malik al-Šāliḥ Ismā'īl が建設した al-Madrasa al-'Imādiya は、サラーフ・アッディーンがワクフを設定しており、al-Šalāhiya という名称が追加されている [AH (D) : 237]。他に、ヌール・アッディーンが設立したとされているにもかかわらず al-Šalāhiya と呼ばれている学院が表中に2件見える。ワクフの追加や改修などの形でサラーフ・アッディーンが関与したのであろう。

末までに設立された31件のジャーミイが挙げられているが、そのうち上位権力者が設立したジャーミイとしては、ウマイヤ・モスクの他にはアイユーブ朝のアーディル1世が606 (1209/10) 年に設立したムサッラー・ジャーミイ (Ġāmi' al-Muṣallā) が見られるのみで [Dāris 2: 419], マムルーク朝のスルターンたちはダマスクスにジャーミイを設立していない。他方、ダマスクスの支配者 (総督) が設立したジャーミイは7件で、そのうちマムルーク朝のダマスクス総督によるものは3件である⁽³¹⁾。つまり、シリア第一の都市であるダマスクスにおいても、上位権力者よりも現地の支配者 (総督) の方がジャーミイと学院の設立に大きく貢献していたことがわかる。

また、ワクフ財についてみると、ダマスクスの学院を支えたワクフ財はレバノンやアレppoといった遠隔地にも存在したが、その多くはダマスクス近郊の農地か市街にある商業施設や家屋、製粉場であった [三浦 1995: 35]。以上の検討によってすべての種類について比較できたわけではないが、ダマスクスにおける宗教施設の設立者とワクフ財の傾向は、おおむねアレppoと類似していると考えられよう。

エルサレムにおける設立者の傾向は、この2都市とはかなり異なっている。アイユーブ朝とマムルーク朝の支配期に設立された80件の各種宗教施設のうち、エルサレムの支配者 (総督) による設立は2件のみで、同じパレスチナ内ではあるが約80km離れたガザの総督を含めても、現地の支配者による設立は4件にとどまる。これに対して、アイユーブ朝のサラーフ・アッディーンは4件を設立し、マムルーク朝のスルターンではカラーウンとカーイトバイがそれぞれ1件を設立しており、スルターンによる設立数は6件に及ぶ。また、アイ

(31) ザンギー朝時代では、ヌール・アッディーンが565 (1169/70) 年に Ġāmi' Dāryā al-Kubrā を再建し、さらに設立年は不詳だが Ġāmi' Qal'at Dimašq を設立した [Dāris 2: 431-432, 442]。アイユーブ朝では、ダマスクス政権君主アシュラフ・ムーサーが荒廃したマスジドを改築して631 (1233/34) 年に Ġāmi' Ġarrāh を設立し、その翌年に Ġāmi' al-Tawba を設立した [Dāris 2: 420, 426]。マムルーク朝のダマスクス総督が設立したジャーミイは、ジャマール・アッディーン・アフラムが設立し706 (1307) 年に竣工した Ġāmi' al-Afram [Dāris 2: 435], タンキズが設立し718 (1318) 年に完成した Ġāmi' Tankiz [Dāris 2: 425-426], ヤルブガー・サイフイーが747 (1346/47) 年に設立した Ġāmi' Yalbugā [Dāris 2: 423] の3件である。

ユーブ朝のダマスクス政権君主ならびにマムルーク朝ダマスクス総督の設立によるものがそれぞれ4件ずつ計8件ある⁽³²⁾。彼らもエルサレムにとっては、スルターンに次ぐ上位権力者か他地域の支配者であったと考えてよからう。マムルーク朝時代のエルサレムはダマスクス総督の管轄下に置かれており両者は比較的關係が深いとはいえ [三浦 2004: 135]、直線距離で 200km 以上も離れているのである。

さらにエルサレムに特徴的なことは、オスマン家の女性やイランの地方政権君主といった遠隔の地の人物が設立者の中に見られるという点である。現地に直接の利害をもつ人物よりも、むしろ遠隔地の有力者が多くの施設をエルサレムに設立した要因は、三浦が指摘するように、ムスリムにとってメッカとメディナに次ぐ聖地であるというエルサレムの特別な地位にあったと言える [三浦 2005: 142]。

ではワクフ財についてはどうか。オスマン朝時代初期のワクフ調査記録を検討した三浦によると、エルサレムのワクフ財も市内や近郊に存在するものが多く、農村からの収入が大きかったという [三浦 2005: 160]。つまり、遠隔地の設立者を惹きつけたエルサレムの諸施設も、主としてその都市を中心とする地域内の農業生産や経済活動に基づくワクフ収益によって運営されていたという点では、アレppoやダマスクスと同様なのである。

この共通点の理由の一つとして考えられるのは、3都市が位置するシリアの自然環境である。降水量が少なく大河が存在しないシリアでは、比較的まばらな農村地帯の中に中小都市が散在し、またナイル川のような大河による水運が利用できない。このような状況下では、ワクフ財の物件は受益施設が存在する都市からあまり遠くない場所に求めるのが管理や輸送の面で理にかなっていたと言える⁽³³⁾。

(32) 以上の数字は、「三浦 2004」所収の表2 [138-140頁] から集計した。

(33) ナイル河口部のダミエッタにある al-Madrasa al-Ašrafiya へは、600km 以上も上流にある農地からの収穫物がナイル川を利用して運搬されていた [長谷部 2004: 74-75]。

お わ り に

マムルーク朝時代後期の15世紀、アレppo市街に存在したイスラーム宗教諸施設を財政的に支えていたのは、主として市街地の商工業施設や50km圏内の農地であり、ワクフ財の分布域はアレppo州内にほぼ限定されていた。一方、施設の設立や維持に中心的な役割を果たしたのは、この地に赴任した総督やアレppo市街の住民たちという地域に直接利害関係のある人々であり、カイロのスルタンの関与は例外的であった。このような傾向はダマスクスでも同様であったが、聖地エルサレムは、現地に直接の利害関係を持たない設立者を多く惹きつけた点で異なっていた。

マムルーク朝時代のエルサレムは、政治的には重要性を失っていたとされる[三浦 2004: 135]。そのエルサレムに外部の権力者たちによる宗教施設の設立が集中する一方で、政治・行政の面ではるかに重要なアレppoとダマスクスにおいては、マムルーク朝スルタンによる宗教施設の設立はほとんど見られなかった。

この事実は、スルタンが首都以外の地に宗教施設を設立する場合は、政治的效果よりも宗教的な動機を重視していたということを示しているのであろうか。そもそも全国規模の政策という観点から宗教施設の設立を進める君主が例外的な存在で、それは中央集権化が進んだとされるマムルーク朝においても同様であったということが³⁴⁾。この疑問に対する答えを探るためにも、地方における上位権力者の宗教施設への関与について、アレppo以外の地域も含めてさらに検討する必要がある。

³⁴⁾ 王朝草創期や領土拡張期の君主には、支配領域各地に宗教施設を設立する例がしばしば見られる。シリア統一を進めたヌール・アッディーンは、中小都市にもマドラサを設立した[Elisséeff 1967, 3: 914-935 (annexe II-VI)]。また、マムルーク朝国家の礎を築いたバイバルス1世は各地にジャーミイを設立したが、その多くは十字軍勢力やイスマーイール派から奪った地に設けられた[TMZ: 347, 348, 352-360]。

史料及び略号

- Abū Šāma, Muḥammad. Šihāb al-Dīn ‘Abd al-Raḥmān. *al-Rawḍatayn fī aḥbār al-dawlatayn*. Ed. by M. Ḥ. M. Aḥmad. Vol. 1, part 1-2. 1956-1962, Cairo. [RD]
- . *Tarāḡim riḡāl al-qarnayn al-sādis wa al-sābi’*. (*al-Dayl ‘alā al-Rawḍatayn*.) Ed. by M. Z. al-Kawārī. 1947. Reprint, Beirut, 1974. [dRD]
- al-Ḥamawī, Yāqūt. *Mu‘ḡam al-buldān*. Ed. by F. Wüstenfeld. 6vols. Leipzig, 1866-1870. Reprint, Tehran, 1965. [MB]
- Ibn al-‘Adīm, Kamāl al-Dīn ‘Umar. *Buḡyat al-ṭalab fī tāriḫ Ḥalab*. Ed. by S. Zakkār. 10vols. + index. Damascus, 1988. [BT]
- . *Zubdat al-Ḥalab fī tāriḫ Ḥalab*. Ed. by S. al-Dahhān. 3 vols. Damascus, 1951-1968. [ZH]
- Ibn Ġubayr, Muḥammad b. Aḥmad. *Riḥlat Ibn Ġubayr*. (*Taḍkira bi-l-aḥbār ‘an ittifāqāt al-asfār*.) Ed. by William Wright. Leiden, 1852. 2d ed., rev. by M. J. de Goeje, 1907. Reprint, Frankfurt am Main: Institute for History of Arabic-Islamic Science at the Johann Wolfgang Goethe University, 1994. [*Ibn Ġubayr*] (日本語訳：藤本勝次, 池田修 (監訳)『旅行記』関西大学出版部, 1991).
- Ibn Ḥaḡar, Šihāb al-Dīn Aḥmad al-‘Asqalānī. *al-Durar al-kāmina fī a’yān al-mi’a al-ṭāmina*. 4vols. Hayderabad, 1930-1931. Reprint, Beirut, n. d. [*Durar*]
- Ibn Ḥallikān, Šams al-Dīn Aḥmad. *Wafayāt al-a’yān wa anba’ abnā’ al-zamān*. Ed. by I. ‘Abbās. 7vols. + index. Beirut, 1972. [WA]
- Ibn Qādī Šuhba, Taqī al-Dīn Abū Bakr. *Tāriḫ Ibn Qādī Šuhba*. Ed. by ‘A. Darwiš. 4vols. Damascus, 1977-1997. [*Šuhba*]
- Ibn Šaddād, ‘Izz al-Dīn Muḥammad. *al-A’lāq al-ḥaṭira fī ḍikr umarā’ al-Šām wa al-Ğazira*. (*Tāriḫ Ḥalab*.) Ed. by D. Soudel. Damascus, 1953. [AH (H)]
- . (*Tāriḫ Dimašq*.) Ed. by S. al-Dahhān. Damascus, 1956. [AH (D)]
- . *Tāriḫ al-Malik al-Zāhir*. Ed. by A. Ḥuṭayṭ. Wiesbaden, 1983. [TMZ]
- Ibn al-Šihna, Muḥammad. *Tāriḫ Ḥalab (The History of Aleppo: Known as ad-Durr al-Muntakhab by Ibn ash-Shihna)*. Ed. by K. Ohta. Tokyo, 1990. [SiH]
- Ibn Taġribirdī, Ġamāl al-Dīn Yūsuf. *al-Manhal al-ṣāfi wa al-mustawfi bā’d al-wāfi*. Ed. by M. M. Amīn et al. 11vols., in progress. Cairo, 1984-continuing. [*Manhal*]
- . *Nuḡum al-zāhira fī mulūk Miṣr wa al-Qāhira*. Ed. by F. M. Šaltūt et al. 16vols. Cairo, 1929-1972. [*Nuḡum*]
- Ibn al-Wardī, Zayn al-Dīn ‘Umar. *Tāriḫ Ibn al-Wardī*. 2vols. Najaf, 1969. [*Wardī*]
- al-Nu‘aymī, ‘Abd al-Qādir b. Muḥammad. *al-Dāris fī tāriḫ al-madāris*. Ed. by Ġa’far al-Ḥasanī. 2vols. Damascus, 1948-1951. [*Dāris*]
- al-Qalqašandī, Aḥmad b. ‘Alī. *Šubḥ al-a’šā fī šinā’at al-inšā’*. 14vols. Cairo, 1913-1920. Reprint, Cairo, [1963]. [*Šubḥ*]

- al-Saḥāwī, Šams al-Dīn Muḥammad. *al-Ḍaw' al-lāmi' li-ahl al-qarn al-tāsi'*. 12vols. Cairo, 1353-1355(1934-1936). Reprint, Beirut, n. d. [DL]
- Sibt Ibn al-'Ağamī, Aḥmad b. Ibrāhīm. *Kunūz al-dahab fī tāriḥ Ḥalab*. Ed. by Š. Ša't & F. al-Bakkūr. 2vols. Aleppo, 1996. [KD] (フランス語抄訳: Trans. by Jean Sauvaget, "*Les trésors d'or*" de Sibt Ibn al-'Ajami. Beirut, 1950. [Trésors])
- al-Ṭabbāḥ, Muḥammad Rāḡib. *I'lām al-nubalā' bi-tāriḥ Ḥalab al-Šahbā'*. 7 vols. + index. 1923. 2nd ed. Aleppo, 1988-1992. [IN]
- Répertoire chronologique d'épigraphie arabe*. Ed. by Étienne Combe et al. 18vols., in progress. Cairo, 1931-continuing. [RCEA]
- Herzfeld, Ernst. *Inscriptions et monuments d'Alep*, vol. 2. Cairo, 1956. [IMA]

研 究

- 阿久津正幸 (1999a) 「ザンギー朝アレppoのマドラサ建設」『イスラム世界』第53号, 1-25頁.
- (1999b) 「中世イスラム世界における教育施設マドラサの政治的機能の再検討」『史学』第69巻第1号, 141-158頁.
- 岩武昭男 (1994) 「公益・福祉制度—ワクフ」後藤明 (編) 『文明としてのイスラーム』栄光教育文化研究所, 219-256頁.
- 太田敬子 (1990) 「Ibn ash-Shiḥnaのアレppo史についての研究」『オリエント』第32巻第2号, 90-102頁.
- 大稔哲也 (1988) 「ザンギー朝の統治と行政官」『東洋学報』第69巻第3・4号, 31-82頁.
- 菊池忠純 (1992) 「マムルーク朝時代のカイロのマンスール病院について」藤本勝次, 加藤一朗両先生古稀記念会編 『中近東文化史論叢』関西大学文学部史学地理学科合同研究室, 47-67頁.
- 佐藤次高 (2004) 「マムルーク朝時代の奴隸商人とカーリミー商人」『史滴』第26号, 132-150(01-19)頁.
- 谷口淳一 (1996) 「11-13世紀のハラブにおけるウラマー三家系」『史林』第79巻第1号, 61-94頁.
- (1998) 「ハラブ史の中のライース達」『西南アジア研究』第49号, 34-52頁.
- (2005) 「12-15世紀アレppoのイスラーム宗教施設」『西南アジア研究』第62号, 66-98頁.
- 長谷部史彦 (2004) 「中世エジプト都市の救貧」長谷部史彦 (編著) 『中世環地中海圏都市の救貧』慶應義塾大学出版会, 45-89頁.
- 三浦徹 (1995) 「ダマスクスのマドラサとワクフ」『上智アジア学』第13号, 21-62頁.
- (2004) 「中世エルサレムにおける救貧」長谷部史彦 (編著) 『中世環地中海圏都市の救貧』慶應義塾大学出版会, 127-181頁.

- 湯川武 (1980) 「6/12世紀のシリアにおけるマドラサの発展」『史学』第50号, 343-365頁.
- 渡辺金一 (1980) 『中世ローマ帝国』岩波書店.
- ‘Abd al-Hāfiẓ, Hamza, ‘Ādil (2000). *Niyābat Ḥalab fī ‘aṣr Salāṭīn al-Mamālīk*, 2vols. Cairo.
- Bosworth, Clifford Edmund (1996). *The New Islamic Dynasties*. Edinburgh.
- Cornu, Georgette (1985). *Atlas du monde arabo-islamique à l’époque classique*. Leiden.
- Dussaud, René (1927). *Topographie historique de la Syrie antique et médiévale*. Paris.
- Eddé, Anne-Marie (1991). "Une grande famille de shafrites alépins," *Revue du Monde Musulman et de Méditerranée*, 62, pp. 61-71.
- (1999). *La principauté ayyoubide d’Aleḥ*. Stuttgart.
- Elisséeff, Nikita (1967). *Nūr ad-Dīn*, 3vols. Damascus.
- Encyclopaedia of Islam*, New ed. Leiden, 1954-continuing. [EI²]
- Humphreys, R. Stephen (1977). *From Saladin to the Mongols*. Albany.
- Martel-Thoumian, Bernadette (1992). *Les civils et l’administration dans l’État militaire mamlūk*. Damascus.

表4 アレッポにおけるワクフ財—15世紀—

No.	受益施設	ワクフ財			
ジャーミィ(表A-1)		所在地	位置区分	種 類	典 拠
8	Mihmandār	al- <i>smuqT</i> 村(Tall Raf‘at 近郊) ‘Azāz ① 受益施設の正面	50km内 50km内 市街	農地(hiṣṣa) 浴場[一部分] 家屋(bayt)	KD 1: 258 (n. 2) KD 1: 258 KD 1: 258
11	Şafi	Darkūš <Darkoush> ⑭	100km内	果樹園	KD 1: 262
15	Rūmī	Ġāmi‘ bi-l-Dabbāga 近隣[Ĥān li-l-Daqqāqīn] Qinnasrīn 門近辺	市街 市街	隊商宿(hān) [一部分] 浴場[一部分]	KD 1: 260 KD 1: 260
20	Nāṣirī 1	内城周辺	市街	浴場	KD 1: 252-253
22	Mawāzīnī	Ma‘arrat ‘Ulyā <Ma‘arat ‘Ouliya> ⑮	100km内	農地?	KD 1: 240
45	‘Alī	[Maṣbanat al-ġzryT]	市街?	石鹼工場 (maṣbana) [2/3]	KD 1: 260
48	Sulṭān	受益施設の周辺	市街	農地?(arādī) [複数]	KD 1: 262
学院(表A-2)		所在地	位置区分	種類	典 拠
8	Niffariya	Tall Bāġir <Tell Badjer> ⑯	50km内	農地?	KD 1: 287
9	Asadiya 1	ダマスクス sArd 村 Bānaqūsā ⑬の外	ダマスクス州 アレッポ州 近郊	不詳 農地(hiṣṣa) 店舗[複数]	KD 1: 303 KD 1: 303 KD 1: 303-304
10	‘Aṣrūniya	アレッポ	市街?	市場[1/2]	KD 1: 279
12	Muqaddamiya	Quwayq 川沿南郊[Raḥā al-Ġawharī] Kaftān <Keftin> 村⑰	近郊 50km内	製粉場(rahā) 農地(hiṣṣa)	KD 1: 353 KD 1: 353
13	Ġawuliya	Tiftināz <Teftenaz> ⑱	50km内	農地(hiṣṣa)	KD 1: 354
14	Ṭumāniya	al-Kallāsa付近[Bustān al-ġwrT]	近郊	果樹園	KD 1: 355
15	Ḥaddādiya	Sūq al-Ḥarīr	市街?	店舗[複数]	KD 1: 351
20	Ġurdikiya	Kaḥar Nūrān <Kefer Nouran> ⑲	50km内	農地(hiṣṣa)	KD 1: 352
21	Ġubayl	Quwayq 川沿南郊[Ṭaḥūn al-dwyr] Quwayq 川沿南郊? [Raḥā al-Muḥḍaṭa] Sūq al-Hawā ['](1) Suwayqat Ḥātīm	近郊 近郊? 市街 市街	製粉場 (ṭaḥūn) [1/6] 製粉場(rahā) [一部分] 店舗[複数] 店舗[複数]	KD 1: 332-333 KD 1: 333 KD 1: 333 KD 1: 333
26	Şāḥibiya	Kaḥar shuAn (‘Azāz 域内) al-Ḥabbālīnの南(2)	50km内 市街?	農地? 市場	KD 1: 294 KD 1: 294

27	Bahā' al-Dīn Ibn Šaddād	<i>krmAyl</i> 村(‘Azāz 域内)	50km内	農地?	KD 1: 378
28	Žahirīya	受益施設に隣接 [Sūq al-Žahir] ‘Ayn <i>ArzT</i> (Albāb 域内)	近郊 市街 50km内	果樹園 市場 [1/2] 農地 (day’a) [大部分]	KD 1: 318 KD 1: 318-319 KD 1: 319
29	Ḥusāmīya	<i>bqrḍwnA</i> 村 Bayt Ra’s 村	不詳 アレppo州	農地 (ḥiṣṣa) 農地 (ḥiṣṣa)	Sih: 113-114 MB 1: 776; Sih: 113-114
30	Sayfiya 2	<i>slAmyn</i> 村(Sarmin 域内) <i>al-mAlkyT</i> 村(‘Azāz 域内) <i>tybsAr</i> 村	100km内 50km内 不詳	農地 (ḥiṣṣa) 農地 (ḥiṣṣa) 農地 (ḥiṣṣa)	KD 1: 317 KD 1: 317 KD 1: 317
32	Šarafīya	<i>al-qrsyT</i> (Bālis への道沿い) Ḥirbil <Tashli Ḥirbil> 村⑤ <i>dyd</i> 村	100km内 50km内 不詳	農地? 農地 (ḥiṣṣa) 農地 (ḥiṣṣa)	KD 1: 314 KD 1: 314(n. 3) KD 1: 314
33	Žahirīya Sultānīya	‘Ayn <i>dqnA</i> (‘Azāz域内) <i>qmry</i> (3) <i>al-qsyT</i> <i>Aṣb’A</i> <i>nbl</i> (Tall Raf’at 近郊) <i>ḥrbtA</i>	50km内 50km内 不詳 不詳 50km内 不詳	農地? 農地? 農地 (ḥiṣṣa) 農地 (ḥiṣṣa) 農地 (ḥiṣṣa)	KD 1: 300 KD 1: 300(n. 3) KD 1: 300 KD 1: 301 KD 1: 301(n. 1) KD 1: 301
36	Rawāḥīya	Tall A’ran <Tell ‘Aran> 村⑫ <i>nyfhyh</i> 村 <i>mšqAlyn</i> 村(4)	50km内 不詳 50km内	農地 (ḥiṣṣa) 農地 (ḥiṣṣa) 農地 (ḥiṣṣa)	KD 1: 306(n. 2) KD 1: 306-307 KD 1: 307(n. 1)
41	Firdaws	Kafar Zaytā <Kefr Zeita> ②③(5) Kafar Zaytā <Kefr Zeita> ②③	100km外 100km外	農地 (day’a) 製粉場 (ṭāḥūn) [2/3]	KD 1: 323 KD 1: 323
43	Ġamālīya	Bānaqūsā [Ḥammām al-‘Atiq] ⑬(6) al-Nayrab⑪ Dābiq <Dabiq> ②	近郊 近郊 50km内	浴場 [3/4] 農地 [4f.] 農地 [4f.]	KD 1: 367; Sih: 117 Sih: 117 Sih: 117
45	Bulduqiya 2	Kafar Zaytā <Kefr Zeita> ②③(7)	100km外	製粉場 (ṭāḥūn) [1/3]	KD 1: 331
48	Fuṭaysīya	Dayr al-Ġamāl <Deir el-Djema> ③(8)	50km内	農地 (ḥiṣṣa)	KD 1: 357
57	Šalāḥīya	al-Ġinān 門外 al-Ġinān 門外	近郊 近郊	隊商宿 (ḥān) [2] 店舗 [複数]	KD 1: 337 KD 1: 337

57	Şalāhiya (続き)	<i>kfrh</i> (‘Azāz 域内) <i>snAğr</i> <i>snAğr</i> <i>al-bryğ</i> 村 (Albāb 域内) ‘Anadān <‘Anadan> 村⑧	50km内 不詳 不詳 50km内 50km内	農地 (<i>hişşa</i>) 農地 (<i>hişşa</i>) 製粉場 (<i>ṭāhūn</i>) 農地 (<i>hişşa</i>) 農地 (<i>hişşa</i>)	KD 1: 337 (n. 2) KD 1: 337 KD 1: 337 KD 1: 337 KD 1: 337
61	Asiqtimuriya	受益施設の近隣 受益施設の近隣 受益施設の近隣 受益施設の近隣 受益施設の近隣	市街 市街 市街 市街 市街	浴場 パン焼き竈 (<i>furn</i>) 隊商宿 (<i>ḥān</i>) 圧搾場 (<i>miʿšara</i>) 店舗 [複数]	KD 1: 369; Sih: 228 Sih: 228 Sih: 228 Sih: 228 Sih: 228
65	Kaltāwiya	Bānaqūsā⑬ 受益施設の近隣 受益施設の近隣 受益施設の近隣	近郊 市街 市街 市街	圧搾場 (<i>miʿšara</i>) 邸宅 (<i>dār</i>) 厩 [複数] (<i>iṣṭablāt</i>) 店舗 [複数]	KD 1: 369 Sih: 228 Sih: 228 Sih: 228
71	Nāṣir al-Dīn 2	アレppo	アレppo州	不詳	KD 1: 441
修道場 (表A-3)		所在地	位置区分	種類	典拠
4	Qadīm	<i>bdytA</i> 村 (Arīḥa 近郊) (9) 受益施設の門前	100km内 市街	農地 ? 店舗 [複数]	KD 1: 391 (n. 2) KD 1: 391
5	Ibn al-Muqaddam	Ġisrayni <Djisirin> 村 al-Muḥammadiya <Moḥammadiye> 村 Kaftān <Keftin> 村⑳	ダマスクス近郊 (東 7 km) ダマスクス近郊 (東 10 km) 50km内	農地 (<i>hişşa</i>) 農地 (<i>hişşa</i>) 農地 (<i>hişşa</i>)	KD 1: 401 (n. 1) KD 1: 401 (n. 1) KD 1: 401 (n. 2)
9	Umm al-Malik al-Şālīḥ 1	[Bustān al-Buq’a] (アレppo 郊外) Kafar <i>krmyṇ</i> 村 (‘Azāz 域内)	近郊 50km内	果樹園 農地 (<i>hişşa</i>)	KD 1: 392 KD 1: 392
11	Muzaffar al-Dīn Kūkbūrī	Aṭ’āna <Ta’ané> ⑥(10) <i>Isyn</i>	50km内 不詳	農地 ? 農地 ?	KD 1: 395 (n. 1) KD 1: 395
13	Fāṭima Ḥātūn	Kafar Ta’āl <Kefer-ṭal> ⑭	50km内	農地 ?	KD 1: 402
16	Šamsiya	Kafar <i>d’Al</i> 村 Sūq al-Ḥabbālīn(11)	不詳 市街	農地 [1 + 1/4f.] 店舗 [複数]	KD 1: 398 KD 1: 398
21	Iqbāl	Bānaqūsā [Ḥammām al-‘Atīq] (12)	近郊	浴場 [1/4 ?]	KD 1: 401

34	Šayḥ Ḥiḍr	Antākiya ^⑬	100km内	不詳	KD 1: 407
40	Tagrī Birmiš	受益施設の門前	市街	店舗[複数]	KD 1: 416
41	Duqmāq	al- <i>mAlky</i> T村(‘Azāz域内)	50km内	農地?	KD 1: 411
42	Bahādīrī	al-Nayrab門近隣 al-Nayrab門近隣	市街 市街	店舗[複数] 隊商宿 (qāsāriya)	KD 1: 424 KD 1: 424
45	Ḥāgg Balāt	Sūq al-Milḥ Ma‘ardibsa村<Ma‘ardis> ^{②⑤} Bāsūfān<Bathoufan> ^⑦ al-Nayrab ^⑪	市街? 100km内 50km内 近郊	市場[1/4] 農地[1/4] 農地[1/2] 農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 415 KD 1: 415 KD 1: 415 KD 1: 415
48	Ġallūm 2	A‘nadān<‘Anadan> ^⑧	50km内	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 425
52	Mağāriba	<i>ḥndArAt</i> 村	不詳	農地?	KD 1: 412
53	Muḏaffar	Kafar d’Al 村	不詳	農地?	KD 1: 422
55	Qalandariya	‘Ayn <i>ArzT</i> 村	不詳	農地?	KD 1: 412
孤児の教室(表A-4)		所在地	位置区分	種類	典 拠
12	Darb al-‘Uḏūl	<i>kkrw</i>	近郊	果樹園	KD 1: 440
13	Ibn al-Ṭayyār	al- <i>mkblsT</i> (内城の下)	市街	隊商宿 (qāsāriya)	KD 1: 441
14	‘Imād al-Dīn b. al-Turğumān	Ḥawar<Ḥawar> ^⑩ Bānaqūsā ^⑬	50km内 近郊	農地? 不詳	KD 1: 440 KD 1: 440
墓廟(表A-5)		所在地	位置区分	種類	典 拠
1	Ḥaššābiya	Billīramūn<Beleramoun> ^⑩	近郊	農地(mazra’a)	KD 1: 427
2	Wālī	Dārat ‘Izzī 村<Darit ‘Izze> ^⑨	50km内	農地?	KD 1: 437
7	Sūdī	Sūq al-Ḥarīr al-Qadīm (Sūq al-Nahḥās) ^⑬	市街	店舗?	KD 1: 434
14	Yašbakiya	受益施設の近隣 [総督が居住する苑]	市街 近郊?	市場 庭園 (ḡunayna)	KD 1: 427; Sih: 229 KD 1: 427
19	Bunay Aybak	Balā 村(‘Angāra ^⑮ 域内)	50km内	農地(ḥiṣṣa)	KD 1: 439 (n. 1)
21	Ḥaṭīb b. al-‘Agamī	al-Aḥaṣṣ 山地	50km内	農地?	KD 1: 434
23	‘Ilmiya	Bāšantrā 村<Beshantra> ^⑰ Suwayqat Ḥātīm	50km内 市街	農地(ḥiṣṣa) 隊商宿 (qāsāriya)	KD 1: 429 KD 1: 429
27	Šafawiya	Quwayq 川沿い	近郊	製粉所(rahā)	KD 1: 428

病院 (表 1)		所在地	位置区分	種類	典 拠
1	Nūrī	Ma'arātā村 (Ma'arata) ⑭	50km内	農地 ?	KD 1: 447 (n.1)
		Wādī al-'Asl (Sim'an 山地内)	50km内	農地 (mazra'a) [1/2]	KD 1: 447; Sih: 226
		al-ḥmyrA (al-Matḥ域内)	50km内	農地 (mazra'a) [5f.]	KD 1: 447; Sih: 226
		Ġarbiya (Ġinān 門外)	近郊	製粉所 (ṭāḥūn) [1/8]	IN 2: 68; KD 1: 447; Sih: 226
		Kafar Nāyā (Kefr Naya) ④	50km内	農地 (mazra'a) [5f.]	Sih: 226
		Mazra'at al-Ḥālidi (al-Matḥ域内)	50km内	農地 (mazra'a) [1/3]	Sih: 226
		Mazra'at al-Ḥālidi (al-Matḥ域内)	50km内	製粉所 (ṭāḥūn)	Sih: 226
		Abū mdAyA ('Azāz 域内)	50km内	農地 (mazra'a) [8f.]	Sih: 226
		al-Farzal (Ferzel) ②⑦	50km内	農地 (mazra'a) [12f.]	Sih: 226
		Bayt rA'l 村 (al-Ġarbiyāt)	近郊?	農地 [1/3]	Sih: 226
2	Argūnī	Sūq al-Hawā'ū ⑤	市街	店舗 (dakākīn) [10]	Sih: 226
		アレッポ郊外	近郊	農地 ?	IN 2: 68; KD 1: 447; Sih: 226
2	Argūnī	Biniš 村 (Binish) (24)	50km内	農地 ?	KD 1: 449

凡例および注

- ・各受益施設は種類毎に設立年代順に配列した。
- ・施設種類見出しの後ろに、対応する表の番号を () に入れて示した。
- ・病院以外の施設名と番号は「谷口 2005」の表 A-1 ~ A 5 に、病院の番号は本稿の表 1 に対応している。
- ・所在地欄の [] 内は施設名。〈 〉内は Dussaud 1927 の表記。丸囲み数字は図 1 の番号に対応している。
- ・読み方が不明の部分は、アラビア文字の綴りを斜体で示した。その場合、A はアリフ、T はター・マルブータを示す。
- ・物件の数または収益権の比率、面積が判る場合は、種類欄の [] 内に記した。f. は faddān の略。
- ・ワクフ財種類の訳語で表中 () 内に示さなかったものを以下に掲げる。市場: sūq; 店舗 [複数]: ḥawānīt; 浴場: ḥammām; 果樹園: bustān。

- (1) 現在の Sūq Bāb Antākīya。
- (2) 現在の Sūq al-Ḥibāl の南か。
- (3) KD の校訂注に従い Sim'an 山地の al-Zarba 地区にある地名と推定。
- (4) KD の校訂注に従い 'Anadān (⑧) 域内の ḥṣqAtyn と推定。
- (5) Bulduqīya 2 と共有。
- (6) Ṭawāšīya (Asadiya 2) との共有。
- (7) Firdaws と共有。
- (8) 受益施設が閉鎖されたため、Qilīḡīya 1 へ移された。
- (9) KD の校訂注に従い Ariḥā 近郊の AbdytA 村と推定。
- (10) KD の校訂注に従い現在の Ṭa'āna と推定。

- (11) ウマイヤ・モスクの南側にある現在の Sūq al-Ḥibāl か。
 (12) 3/4は Ġamāliya のワクフ。
 (13) 「ウマイヤ・モスクの南側に位置する」という注記あり。現在の Sūq Ḥān al-Naḥḥāsīn か。
 (14) 50km圏内に同一地名が複数存在。
 (15) 現在の Sūq Bāb Anṭākiya。7件はウマイヤ・モスクと共有。

表5 アレッポにおける宗教施設設立者——12-15世紀——

ザンギー朝時代以前

アレッポの支配者	施設	経歴（アレッポとの主な関わり）	典 拠
1 Badr Dw. Sulaymān	学1	515(1121/22)年アルトゥク朝アレッポ総督。516-517(1122/23-1123)年単独支配。	ZH 2: 207, 209, 212
2 Šams al-Ḥawāṣṣ Lu'lu'	修1	セルジューク朝アレッポ政権に仕えたハーディム。508(1114)年に君主を暗殺して実権を奪う。511(1117)年殺害。	AH: 93; BT 4: 1984-1985; 谷口1998: 38

ザンギー朝時代（1127-1183年）

アレッポの支配者	施設	経歴（アレッポとの主な関わり）	典 拠
3 Nūr Dn. Maḥmūd	学3-8, 10, 11 修4, 6, 7 病1	ザンギー朝シリア政権初代君主。541(1146)年即位当初はアレッポが首都。549(1154)年に獲得したダマスカスへ移り、569(1174)年同地で没。	省略
4 Maḡd Dn. Ibn al-Dāya	学2 修2, 3	有力軍人。541-565(1146/47-1169/70)年、総督在任。565年没。	AH: 94; 大稔1988: 256
アレッポの支配層（文官以外）			
5 Sa'd Dn. Kumuštakīn	修10	第2代君主 Mk al-Šāliḥ Ismā'īl 幼少時に権勢を振るった有力軍人。573(1177/78)年没。	AH: 94; KD 1: 396-397; WA 7: 168; ZH 3: 35
6 Umm Mk. al-Šāliḥ	学16 修9	第2代君主サーリフの母。578(1182)年以降没。	AH: 93, 122
7 Ḥusām Dn. Ṭumān al-Yārūqī	学14	サーリフ麾下のアミール。579(1183)年ラッカへ移ったがアレッポにも邸宅があった。	ZH 3: 25, 45, 66, 91
8 Ġamāl Dn. Šaḡbaḥt	学19, 24	内城総督。サーリフの後見人として権力を振るった。589(1193/94)年以降没。	BT 4: 1822-1823; IN 4: 300; WA 7: 165; ZH 3: 54-55

支配層(アレppoにおける職位不明)				
9	Asad Dn. Šīrkūh	ジ3 学9	有力軍人。546(1169)年ファーティマ朝征服後まもなく没した。主要なイクターはヒムスにあった。	WA 2: 479-481
10	‘Izz Dn. ‘Abd Mk. al-Muqaddam	学12 修5	モースル政権下で Singār の城塞総督。541 (1146) 年ヌール・アッディーンに帰順。	AH: 116; ZH 2: 296-297; 大稔 1988: 250
11	Sunqurğāh al-Nūrī	修8	ヌール・アッディーンのマムルークか。554(1159/60)年以降没。	KD 1: 400
12	‘Afīf Dn. ‘Abd al-Raḥmān al-Nūrī	学13	ヌール・アッディーンのマムルークか。566(1170/71)年以降没。	AH: 116-117; KD 1: 354; ND 2: 178
その他(アレppoと関係あり)				
13	Faḥr Dn. Muḥammad Ibn al-Ḥaššāb	墓1	ハッシャープ家の一員。12世紀初頭に住民指導者として活躍。519 (1025/26)年没。	AH(H): 35; 谷口1996: 83-85

アイユーブ朝時代(1183-1260年)

アレppoの支配者	施設	経歴(アレppoとの主な関わり)	典 拠	
14	Mk. al-Zāhir Ġiyāt Dn. Ġāzī	学17, 28,33	アレppo政権初代君主。579(1183)、582-613(1186-1216)年、在位。	省略
15	Ḍayfa Ḥātūn	学41 修19	ザーヒルの后。634(1237)年ナースィルが幼少で即位すると実権を掌握。640(1242)年没。	Humphreys 1977: 229, 452(n. 66); IN 2: 212; ZH 3: 225 ff.
アレppoの支配層(文官以外)				
16	‘Izz Dn. Ašūd al-Yārūqī	学23	12世紀後半に活躍したアミール。トゥルクメン系ヤルルーキーヤ氏族。	WA 6: 117; ZH 3: 61, 67, 71, 129-130
17	Sayf Dn. ‘Alī	学18, 22,30 修12	ザーヒルとアズィーズの2代にわたって仕えた有力アミール。622(1225)年没。	AH(H): 38; dRD: 145-146; IN 2: 191, 4: 325-330; ZH 3: 144 ff., 178, 185
18	Ḥusām Dn. Maḥmūd b. Ḥutlū	学29	Šihnaを務めた軍人。ハナフィー派有力家系シフナ家の祖。626(1128/29)年没。	太田 1990: 91, 101(n. 23); Sih: 113-114
19	Šihāb Dn. Ṭuġrīl	学31,34 修14,15	ザーヒルの解放奴隷。628(1230/31)年までアタベクとして影響力を保持。631(1233)年没。	IN 2: 202-203; ZH 3: 170 ff., 211, 215
20	Ḥusām Dn. Bulduq	学38,45	アミール。ザーヒルの解放奴隷。635(1237)年以降没。	AH(H): 108; ZH 3: 195
21	Ġamāl Dw. Iqbāl	学43 修21	ダイファ・ハートゥーンの解放奴隷。彼女に登用され権勢を誇った。641(1243)年没。	BT 4: 1952-1953; ZH 3: 225, 243, 266-267
22	‘Alā’ Dn. Ṭay Buġā	修23	ザーヒルのマムルークと推定される。650(1252)年没。	KD 1: 400; AH(H): 94
23	‘Alā’ Dn. ‘Alī	学42	ダイファ・ハートゥーンの側近。654(1256)年没。	AH(H): 120; IN 4: 413-414

24	Fāṭima Ḥatūn	修13	第2代君主アズィーズの妻。スルターン=カーミルの娘。656(1258)年没。	AH(H): 95; KD 1: 402
25	Šams Dn. Lu'lu'	学44	アミール。第3代君主ナースィル幼少時の後見人の一人か。13世紀前半に活動。	AH(H): 109; ZH 3: 225, 252, 264
26	Ḥusām Dn. al-Ḥasan al-Qaymarī	学47	アミール。クルド系カイマリーヤ氏族。646(1248/49)年以降没。	AH(H): 109; Humphreys 1977: 275, 341
27	Aydimur al-Ẓāhirī	墓2	13世紀前半にアレppo政権に仕えた軍人。walī Ḥalab という肩書きを持つ。	KD 1: 437
28	ʿIsā al-Kurḏī al-Hakkārī	ジ7	šihnat al-šurṭaを務めた軍人。	AH(H): 38, KD 1: 235
支配層(アレppoにおける職位不明)				
29	Ḥusām Dn. Muḥammad	学15	サラーフ・アッディーンの甥、アミール。ナブルスをイクターとして得る。587(1191/92)年没。	BT 1: 62; KT 12: 77; Humphreys 1977: 421, 426
30	ʿIzz Dn. Ġurḏīk	学20	サラーフ・アッディーン麾下のアミール。588(1192)年エルサレム総督に就任。594(1198)年没。	IN 2: 79, 81-82, 110; KD 1: 351-352; KT 11: 557, 12: 87, 134; Humphreys 1977: 78-79, 101
31	Muẓaffar Dn. Kūkbūrī	修11	サラーフ・アッディーンに仕えた軍人。アルビルを得るが後に奪われる。630(1233)年没。	WA 4: 113-120
32	Badr Dn. Badr al-Ḥādīm	学39, 40	アサド・アッディーン・シールクーフの解放奴隷。632(1235)年以降没。	AH(H): 117; IN 4: 247
33	Ibn al-Tinnabī	修20	アミール。639(1241)年没。	AH(H): 94
34	Fuṭays	学48	アイユーブ家の解放奴隷でアミールになった人物の息子。649(1251/52)年没。	AH(H): 95, 118
35	Muḡāhid Dn. Muḥammad	学49 墓6	アミール。650(1252/53)年以降没。	AH(H): 118; IN 4: 403-404
36	Badr Dn. Badr	学25	サラーフ・アッディーンと女奴隷との子であるʿImād Dn. Šāḡīの解放奴隷。	AH(H): 106; RD: 711
37	Bayram	修32	サラーフ・アッディーンの叔母 Sitt Ḥārīm のマウラー。	AH(H): 95; KD 1: 401
38	Bint Sābiq Dn. ʿUṭmān	修25	シャイザル領主の娘。父はヌール・アッディーン治下のアレppo総督マジュド・アッディーン(4)の一族。	AH(H): 61; ZH 3: 17-18; 135; 大稔1988: 67-68
39	Zumurrud Ḥātūn	修27	サラーフ・アッディーンの姪。	AH(H): 95
40	Bint Wālī Qūṣ	修26	クース総督の娘。	AH(H): 95; KD 1: 403
41	al-Kāmiliya zawḡat ʿAlāʾ Dn.	修24 墓5	ダイファ・ハートゥーンの側近 ʿAlāʾ Dn. ʿAlī の妻か。	AH(H): 96; KD 1: 404

アレppoの文官				
42	Bahā' Dn. Yūsuf Ibn Šaddād	学26, 27 修17	591(1194/95)年以降ワズィールやカーディーを務め、マドラサでも教えた。632(1234)年没。	WA 7: 84-100
43	Ġamāl Dn. 'Alī Ibn al-Qiftī	墓4	598(1201)年より断続的にワズィール等の高官を歴任した。646(1248)年没。	KD 1: 430; EI ² , "Ibn al-Qiftī ..."
44	Mu'ayyid Dn. Ibrāhīm Ibn al-Qiftī	学50	646(1248)年にワズィールに就任。658(1260)年に没するまで在職。(43)の弟。	Eddé 1999: 314
45	Kamāl Dn. 'Umar Ibn al-'Adīm	学46	アブー・ジャラーダ家出身。マドラサ教授のほか外交使節としても活躍。660(1262)年没。	谷口 1996: 73-74
その他(アレppoと関係あり)				
46	Šams Dn. Aḥmad Ibn al-'Aḡamī	学21 修16 墓3	アジャミー家のウラマー。631(1233/34)年没。	AH(H): 94; Eddé1991: 67-68
47	'Izz Dn. al-Murtaḍā	学53	アレppoのナキーブ家系に生まれる。ナキーブとヒスバを歴任。653(1255)年没。	dRD: 189; IN 4: 410-411
48	Šaraf Dn. 'Abd al-Raḥmān Ibn al-'Aḡamī	学32	アジャミー家のウラマー。ザーヒリーヤ学院のナズィールと教授を歴任。658(1260)年没。	Eddé 1991: 67-68; 谷口 1996: 80-81
その他(アレppoとの関係不明)				
49	Ibn Rawāḥa	学36	ダマスクスの大商人。622または623(1125/26)年に同地で没。	Dāris 1: 265-267; IN 4: 45, 330; dRD: 149; WA 3: 245

マムルーク朝時代(1260年-15世紀後半)

上位権力者(スルターン)	施設	経歴(アレppoとの主な関わり)	典拠
50	Mk. al-Nāšir Muḥammad	学56 スルターン。693-694, 698-708, 709-741(1293-1294, 1299-1309, 1310-1341)年在位。	省略
51	Mk. al-Zāhir Ḥuṣṣadam	修44 スルターン。865-872(1461-1467)年在位。	省略
52	al-sultān	墓22 ワキフとしてal-sultānとのみ記される。	KD 1: 437
アレppoの支配者(総督)			
53	Sūdī al-Ġamdār	墓7 712-714(1312-1314)年、総督在任。714(1314)年アレppoで没。	IN 2: 298-300; KD 1: 434
54	Altun Buḡā al-Šāhīr al-Nāšīrī	ジ9 714-727(1314/15-1326/27)、731-739(1330/31-1339/40)年、総督在任。742(1341/42)年没。	KD 1: 235; <i>Manhal</i> 3: 53-56
55	Argūn al-Nāšīrī	墓8 727-731(1326/27-1330/31)年、総督在任。在任中に没。	<i>Durar</i> 1: 351-352; IN 2: 311
56	Argūn al-Kāmīlī	ジ14 病2 750(1349/50)年と754(1353/54)年、総督に就任。離任年不詳。758(1356/57)年没。	IN 2: 348-349, 352-354; KD 1: 250 (n. 1), 448

57	Manklī Buḡā al-Šamsī	ジ15	763(1361/62)年と768(1366)年、総督に就任。いずれも翌年には転出。774(1372年)年没。	<i>Durar</i> 4: 367; KD 1: 243; IMA: 344
58	Sayf Dn. Aṣīqtimur	学61 孤2 墓12	765(1363/64)年から781(1379/80)年にかけて5回にわたって総督として統治。アレppoで隠居し791(1389)年に没。	KD 1: 369; <i>Manhal</i> 2: 451-454; IN 2: 366; ‘Abd al-Ḥafīz 2000, 2: 303
59	Yalbuḡā al-Nāṣirī	ジ20	783-787(1381/82-1385/86)、788-793(1386/87-1390/91)年、総督在任。793(1390/91)年刑死。	IN 2: 370, 372, 373, 383; KD 1: 252
60	Sūdūn al-Muzaffarī al-Ḥāhirī	ジ21	787-788(1385/86-1386/87)年、総督在任。	IN 2: 372-373; IMA: 353
61	Tagrī Birdī al-Atābakī	ジ22 孤4	796-800(1394-1397)年、総督在任。815(1412)年ダマスカスで没。	KD 1: 237; <i>Manhal</i> 4: 31-32
62	Aqbuḡā al-Utrūš	ジ24	801-804(1398/99-1401/02)年、総督在任。再び総督に就任した翌月、806(1404)年に没。	DL 2: 316; KD 2: 110; Sih: 61-62
63	Duqmāq	修41	804-806(1401/02-1403)年、総督在任。808(1406)年、ハマー総督在任中に殺害。	KD 1: 411, 2: 109-110
64	Yašbak al-Yūsufī	墓14	820-824(1417-1421)年、総督在任。824(1421)年没。	IN 3: 15-16; <i>Nuḡūm</i> 14: 56, 235
65	Tagrī Birmiš	修40	839-842(1435/36-1438/39)年頃、総督在任。842(1439)年没。	IN 3: 32; KD 1: 417-421; <i>Manhal</i> 4: 58-65
アレppoの支配層(文官以外)				
66	Šalāḥ Dn. Yūsuf b. al-As‘ad	学57	šadd al-dawāwīn, ḥāḡib, šadd al-māl wa-l-wāqif等を歴任。745(1344)年没。	<i>Wardī</i> 2: 486; KD 1: 336
67	Mūsā b. ‘Abd Allāh al-Nāṣirī	墓9	ḥāḡibを務めた。756(1355/56)年没。アレppoの墓に埋葬された。	KD 1: 438
68	Aḡilbak b. ‘Abd Allāh al-Ġāṣankīr	墓10	ḥāḡibを務めた。760年代(1358-1367年)に没。	KD 1: 435-436
69	Ṭuqtimur al-Kaltāwī	学65	amīr mā‘ia wa-muqaddam alf として赴任。晩年に ḥāḡib を務め、787(1385)年アレppoで没。	<i>Durar</i> 2: 224; KD 1: 369; <i>Manhal</i> 6: 419-420; IN 5: 94
70	al-Ḥusayn b. Balabān al-Mihmandār	ジ8	14世紀にアレppoでアミールを輩出したミフマンダール家の一員。	IN 5: 22, 107; KD 1: 258-259
71	al-Ḥaḡḡ Balāṭ	修45	総督 Īnāl al-Yašbakī (863-865? [1458/59-1460/61?] 年 在 任) の dawādār。	DL 2: 330; IN 3: 50; KD 1: 415
72	Faḥr Dn. ‘Uṭmān Ibn Uḡulbak	ジ28	アミール、官僚。アレppo出身。dawādār al-sultān bi-Halab 等を歴任。885(1480/81)年没。	DL 5: 125; IN 5: 290-292; KD 1: 251
支配層(アレppoにおける職位不明)				
73	Ibn al-Šāḥib	孤1 墓11	軍人。学問を好み、学者と親しく交わった。765(1363/64)年没。	IN 5: 43-44; KD 1: 435

74	al-As'ardī	修36	ハマー総督。不遇時にアレppoの'Abd al-Rahmān Ibn Sahlūlから厚遇された。773(1371/72)年以降没。	KD 1: 404; <i>Šuhba</i> 3: 47
75	Aqṣā Hāzindār Iṣbak	学70	バルスバイに仕えたマムルーク。失策を犯し逃亡。主君の没(841 [1438]年)後アレppoへ到る。	KD 1: 371; Sih: 230
76	Muḥammad al-Zakī	ジ25	ハルカ兵士。15世紀初頭前後に活動。	KD 1: 263
77	Nāṣir Dn. b. Dī al-Qādir	学71 孤9	アミール。15世紀前半に活動。	KD 1: 441
アレppoの文官				
78	Šafī Dn. 'Abd al-Wahhāb	ジ11	官僚。mušārīf dīwān al-ḡuyūš al-manšūraを務めた。733(1332/33)年以降没。	KD 1: 262
79	Kamāl Dn. Ibrāhīm	修39	官僚。nāzīr al-ḡayšを務めた。831(1427/28)年没。	KD 1: 424
80	Šihāb Dn. Aḥmad Sibṭ Banī al-Saffāḥ	ジ26	官僚。官僚を輩出したサッフアーフ家に連なる。nāzīr al-ḡayš, kātīb al-sirr 等を歴任。835(1432)年没。	IN 5: 184; Martel-Thoumian 1992: 202-211
81	Nāṣir Dn. Ibn Taqā	学72	官僚。父の代にアレppoへ移住。父も総督達の下で働いた。855(1451)年没。	KD 1: 338
82	Ġamāl Dn. Yūsuf b. al-Nihṛīrī	ジ29	マーリク派カーディー。896(1491)年、在職中に没。	DL 10: 339; KD 1: 261
その他(アレppoと関係あり)				
83	Badr Dn. b. Zuhra	修34	naqīb al-ašraf の地位を父から継いだ。762(1360/61)年没。	IN 5: 35; KD 1: 406
84	Ẓahīr Dn. b. al-'Aḡamī	学67	アジャミー家のウラマー。774(1372)年没。	IN 5: 56-57
85	'Ala' Dn. 'Alī Ibn Abī al-'Asā'ir	学64	ウラマー。晩年にウマイヤ・モスクのハティーブを務めた。778(1376/77)年没。	KD 1: 372
86	Ḥamza al-Ġa'farī	学63	サイイド。ウマイヤ・モスクのナーズィルなどを歴任。803(1400)年頃以後没。	IN 5: 228; KD 1: 217, 380
87	Šihāb Dn. Aḥmad al-Hilālī	修42	ウラマー。父の代にアレppoへ移住。841(1437)年没。	KD 1: 422-424
88	Muḥammad Ibn al-Ma'sarānī	ジ27	アレppoの墓廟やマドラサで禁欲的生活を送ったウラマー。852(1448)年没。	KD 1: 248, 2: 211-212
89	Muḥammad b. Muḥammad Ibn al-Ḥarrāz	墓13	ウラマー。14-15世紀に活動。KDの著者の父 Ibrāhīm (841 [1437/38] 年没)の師。	KD 1: 436
90	'Abd al-Karīm al-Šūfī	ジ32	スーフィー。15世紀前半-半ばにアレppoで活動。	KD 1: 256

91	Šihāb Dn. al-Malaṭī	孤17	アレppoの有力商人。al-ḥawāḡa というラカブを持つ。852(1448)年、ルーミー・ジャーミイの修築資金を寄付。	KD 1: 243-244, 444
92	al-ḥādim	修49	アジャミー家の解放奴隷。	KD 1: 398
93	Šams Dn. Muḥammad al-Dūrī	修43	アレppoの有力商人。al-ḥawāḡa というラカブを持つ。	KD 1: 409
その他(アレppoとの関係不明)				
94	Muẓaffar	修53	スーフィー。al-Ġubayl の墓地に埋葬された。	KD 1: 422
95	Ibn al-Ġazarī	ジ45	有力商人。al-ḥawāḡa というラカブを持つ。	KD 1: 259
96	al-Rūmī	ジ35	商人。	KD 1: 260
97	Ḥusayn b. Muṣṭafā	修38	有力商人。al-ḥawāḡa というラカブを持つ。	KD 1: 408

凡例および注

- Dw.: al-Dawla, Dn.: al-Dīn, Mk.: al-Malik
- 設立者は、没年、施設の設立時期、活動時期などに基づいて各区分内で時系列に沿って配列した。
- 施設欄の略号は次のとおり。ジ：ジャーミイ（表A-1）、学：学院（表A-2）、修：修道場（表A-3）、孤：孤児の教室（表A-4）、墓：墓廟（表A-5）、病：病院（表1）。略号の後ろの数字は、該当する施設の（ ）内に示した表における番号を示す。
- 典拠欄には経歴に関する典拠を示したが、Bosworth 1996に挙げられている人物については省略した。
- 「谷口 2005」表A-1 (1): 32 Muḥaṣṣab の設立者は「不明」となっているが、本表 no. 90 の人物に訂正する

〔付記〕 本稿は科研費（課題番号16520430）およびNIHUプログラム「イスラーム地域研究」による研究成果の一部である。

ISLAMIC RELIGIOUS INSTITUTIONS IN ALEPPO DURING THE MAMLUKID PERIOD

TANIGUCHI Jun'ichi

The following points have been elucidated through an analysis centered primarily on the Islamic religious institutions in Aleppo during the later-Mamlukid period of the 15th century.

The majority of the funds for the *waqf* endowment that supported religious institutions was taken from the profits of commercial establishments and public baths within the city and farmlands within a 50-kilometer radius (a one or two-day walk) of the city.

Those who played a central role in establishing and maintaining these institutions were the governors and the residents of the city who had a direct interest in the region. The governors established large-scale religious institutions in the city as did wealthy merchants, and they bore the costs of their upkeep and repair. Those who could not establish such facilities on an individual basis made contributions in the form of small donations of money or labor.

On the other hand, it was not only the case during the various dynasties that had only nominal suzerainty, but also during the Mamlukid period when the governor was sent from Cairo to Aleppo, that sultans seldom became involved in the establishment and maintenance of religious institutions in this city.

This same tendency could also be seen in the central Syrian city of Damascus. The holy city of Jerusalem on the other hand attracted many donors who had no direct interest in the locality and thus it differed from Aleppo and Damascus. The fact that the financial basis of religious institutions was chiefly grounded in the locality was a point in common among these three cities.

In conclusion I point out the fact that although there was a concentration of the establishment of religious institutions by powerful figures from outside Jerusalem, in the far more politically and administratively important cities of Aleppo and Damascus the Mamlukid sultans seldom established any religious institutions.